

1. 療育教育総合センター長挨拶

本日のテーマは、地域ぐるみで行う子育てということで、子育てしやすいまちづくりのために市民はどのようなサポートができるのか、市長と東京都八王子市の先進的な取り組みを伺い、それを基に参加者で自由に話し合ってもらいたい。

2. 市長挨拶

これまで星山先生の講座を聞いて子育て支援を頑張ってくられた方を中心に、まちづくりトークという形で、これからの逗子における子育ての在り方を共有していきたい。八王子市の先進的な取り組みを非常に楽しみにしている。

■第 1 部

1. 基調講演

①テーマ 子育てしやすいまちづくりのために

講師 明星大学教授 星山麻木先生

逗子は自然が豊かなので取り入れられていると思う。世界の優れた教育も自然の中でずっと一日過ごす幼稚園とか、氷を固めて葉っぱをかけて光がきらきら当たっているのをみんなで見ると、自然と遊ぶということが推奨されている。

75%の子が枠の中に入る普通の子(定型発達の A 君タイプ)だとしても、残りの 25%は枠に入らず、多数派と違う発達をする。発達多様性のある B 君タイプは、自分の中に発達の早い所とゆっくりの部分に差があるタイプの子。医学モデルでは発達障がいと言うかもしれないが極力発達障がいというキーワードは使わないようにしている。文部科学省によると、小学校 1 年生の通常学級の約 10 人に 1 人は発達多様性のある子。私たちの世代はそのことについて勉強してこなかったのが、知らないことが多い。逗子市ではみんなで学ぶこと、自分の中にある多数派でならなければいけない、標準でない不安だ、という枠を自分の中で取ることで色々な子どもを受け入れられる自分になって、受容できる力をつけるということが、非常に大切なことだと思っている。

例えば ASD。ASD の S はスペクトラムという意味で、連続体という意味。自閉症と言われている子から自分まで、人間を何万人も並べたら、自分はその延長線上に必ずいるという連続体であるという発想。もともと弱い自分で生まれて、子育てで助けてもらって強い自分になったつもりではあるけれど、人間はまたやがて弱い自分に戻っていただけなのだという発想をみんなが持てたら、思いやりを持ってお互い助けられるのではないかと、というのが、スペクトラムという考え方。正義感の強い子、なんでも完璧にしたい子、じっとしていられない子、甘えん坊の子、全部ゆっくりな子。いろいろな子が自分の中にもいる。例えば、お

となでも ASD 連続体でその傾向のある方はたくさんいる。ASD と診断されているわけではないが、自分にも特性で似ているところがあるなあ、と理解できれば、場面に応じて困っている子を助けることができるのではないかな。いろんな発達の子どもたちが生まれてくるのは、誰のせいでもなく、環境が豊かだから、だと私は考えている。もし逗子市に色んな子どもが生まれてくるのであれば、逗子の自然環境や家庭環境が豊かで多様性に満ちているから。子どもたちの脳の機能はそれに合わせて進化し、変わっていきただけではないだろうか。

すべての子が標準化、多数派になることを目指すのではなくて、自分の他の人とは違うことを強みにできること、その素晴らしさや良さをみんなで認めてつながっていこうという支援の在り方、温かい姿勢やつながりのあるコミュニティをつくるということが、逗子市が目指そうとしていることだと思う。

皆で学んだことで誰かの力になれる自分になるって、なんて素敵なのでしょう。ひとりぼっちだった自分が素敵な仲間に出会って、学んで、初級中級そして上級まで行けるといい。その方々が色んなところで色んな形で地域の子どもや誰かのために活躍してもらえると、また皆さんを通して新しい出会いになって、広がっていくのではないかなと思う。

2. 基調報告

①テーマ 学校サポーター育成と学校との連携

講師 八王子市学校教育支援課 粟澤哲也さん

八王子市は最初、メンタルサポーターという仕組みがあった。これは特別支援教育に限ったものではなく、不安や無気力、孤立という状態の子どもたちが、学校で教室に入れなかったりしていたので、その子どもと係わっていただくことを目的に、そういう人たちをサポーターと位置づけていた。特別支援教育が始まると、通常学級での発達障がいの子どもたちへの対応が求められるようになり、そこに特に力を入れてサポーターの支援力を向上させようと取り組みを始めた。

支援者としての登録には 2 通りある。一つは、直接知っている学校と話をし、その学校のサポーターとしてスタートするやり方。もう一つは市教育委員会に登録してニーズのある学校を紹介してもらい、その学校でスタートするやり方。八王子市の学校サポーターは、地域の方のボランティアであり、特別支援教育を学んでいる人や我が子の特性を理解したい人が勉強としてスタートした人もいる。こういう地域と学校のニーズが集まって、現在の講座になった。

八王子市では独自の講座や研修の中で学ぶ仕組みを作っていて、それが学校サポーター研修と認証サポーター育成制度。学校には、支援者が欲しいというニーズはあるが、学校のルールを守ってもらえるのか、先生方との関係は大丈夫なのか、どこまで頼んでいいのかなど、受け入れる先生方の不安が課題である。一方で、学んでいる方は、特別支援教育の知識

以外にも支援者としての子どもとの関わり方、先生との共通言語などが必要で、学校と関わるためには、たとえボランティアでもルールを守らなければならない。こういったことを考えると、支援者の人材育成はとても大事。ボランティアしたいからどうぞと受け入れるだけではいけない。こういったことを学んでもらえるように八王子市では学校任せにせず、教育委員会が主体的に学校サポーター育成講座をやっている。

市が独自に作っている認証制度と講座をリンクさせ、受講すると市の認証サポーターとしてスキルアップができるということを進めている。逗子市も、これからの学びの形の中でできてくるものではないかと思う

先生の多忙感の解消のためにサポーターを付けて欲しいというお話があったりもするが、一番は、地域の子どもたちの健やかな学びを支えるためのサポーターであってほしい、子どもたちのためにサポーターにいてほしいというのが願い。学びの場を大事にして、学校と一緒に楽しく充実感を持って関わっていただけたらと思う。

②テーマ 学校サポーターの実践から

講師 早期発達支援士 笹原きよみさん

育てにくい我が子の理解ということから学びを始めたのがきっかけ。学びを通したつながりは、支援者としての財産で大切なことを共有できる存在となる。みんなそれぞれの場面で悩んだことを講座に持ち寄って支援方法の情報を共有し、また現場に持ち帰って試した。

いい支援を行うことで、先生も気づいてくれて、まねをしてくれるようになる。これがうまくいった支援のポイントだったのではないかと思う。なんでもうまくいったかを自分自身が知っていることも大事。それを人に伝えられるかということも重要で、そこが実践と結びついているから人に伝えられるものになるということが実感としてある。

一緒に学んできた仲間は得意な部分を生かし、それぞれ別の場で活躍している。私自身は発達相談や保育園の巡回発達相談などで先生や保護者と話をしたり、療育をしたり、講演会勉強会などで講師をしながら次世代のサポーターを育成している。その中で時々「自分がやっていることは子どもにとって本当に良い支援なのだろうか」という質問を受ける。そんな時には、支援の答えは子どもの笑顔ですよと伝えている。おもしろおかしい笑いではなく、心からの笑顔があることが支援の答えでないかと思う。関わりを大切にすることで得られる子どもたちの笑顔が、自分を幸せにしていると実感している。

③テーマ 互助グループの経験

講師 星とおひさま Fika キャラバン副代表 貴家由美子さん

発達障害について学び始めると、自分の欠点もプラスに考えられるようになる。それは「欠点」だと思っていた箇所が、別の角度から見ると「オリジナルな利点」に見えてくる事に気づくからだ。

子育てしやすいまちをつくるために市民ができること。それは各々が逗子市の市民である事を自分事としてとらえていくこと。自分が通っている学校をどうしていきたいのか、自分たちで考えられる。市民は職員じゃないから自由な発想で動くことができる。市民は顔の見える人同士で手をつなぐことができる。市民は、市や県や国をきっと動かすことができる。教育委員会に行ってみると意外にやってくれる。みなさんも逗子市に、「何でやってくれないの？」ではなく、「〇〇やったらどうですか？一緒にやりませんか？」のように共に動くよう語り掛けをするといいかもしれない。

小中学校では、よく隣のクラスの先生はと比べる人がいるが、それぞれは違っていい。大人も子どもも先生も違っていい。授業のやり方、クラス運営も違っていいはず。

この町を住みよい街にしていくアプローチは限りなくある。自分に向いている方法を見つけて続けられるといい。「星とおひさま Fika キャラバン」は、保護者の気持ちをほぐして、手を繋ぎやすくする手助けをしている。親が繋がると子どもも繋がる。繋がるイメージをみんなで作る事ができればと思う。

■第 2 部 ワールドカフェ 子育てしやすいまちをつくるために市民ができること